

本部だより

●第39号



マーシャル方面遺族会

<http://mibfa1926.com>



●発行日:平成31年2月1日 ●発行人:高林芳夫
●本部:181-0012 東京都三鷹市上連雀8-7-8
●電話 & FAX:0422-77-8557 ●編集人:鈴木千春



ウオッセ島遺骨調査、マジロでの報告会。大酋長(前列左から2人目)、地権者の皆様、公共事業大臣、大使館スタッフ、派遣メンバー



新年あけましておめでとうございます。
お健やかに新しい年をお迎えの事とお慶び
申し上げます。

当会は昭和38年に設立され、今年で56
年目を迎えます。今年天皇陛下の御譲
位、皇太子殿下の御即位、平成から新し
い年号へと歴史が生まれ変わる年で
あり、来年には東京オリンピック、パラ
リンピックが開催されます。現在、東京
では関連施設の建設や大会に携わる大勢
の人々が準備に大忙しです。また日本の
台所、築地市場も83年の歴史に幕を下ろ
し、新しく豊洲市場がオープンしました。
歴史は常に前へ前へと動いています。
現在の日本の繁栄は、先の戦争で、尊
い一命を国に捧げられた英霊のおかげ
です。

英霊に感謝の誠を捧げましょう。
皆様、今年もお元気で、そして希望に
満ちた一年でありますよう、心よりお祈
り申し上げます。

平成31年度 慰霊祭、総会、直会のご案内

平成31年度の慰霊祭、総会、直会（食事会）を次の通り開催致します。

皆様お誘いあわせの上ご参加下さい。

日 時 平成31年4月7日（日）

受付 靖国神社参集殿前にて、午前9時より受付を開始します。

9時45分までにお済ませください。
待合室は参集殿2階「楠の間」。

■慰霊祭

午前10時より昇殿参拝。

■写真撮影

昇殿参拝後、全員「楠の間」にて集合写真を撮ります。

■総会

同会場にて総会を開催致します。

※総会の最後に、ウオツゼ島遺骨調査派遣団員（当会会員）より写真

など現地の様子を報告します。

終了予定時間 11時30分頃

■直会（食事会）

今年の直会は食事会といたします。

総会終了後、ホテルグランドヒル

市ヶ谷」に移動してランチを頂きながら会員相互の親睦を図ります。

ご縁を深めるためにも大勢の皆様のご参加をお待ちしています。

会 費 5000円

終了予定時間 14時30分頃

●お願い

1 慰霊祭出欠はがき

同封のはがきに必要事項をすべてご記入の上、2月末日までに本部へ届くよう投函下さい（欠席の方もお願いします）

2 お振込み

同封の郵便振替用紙で2月末日までに、お振込みをお願い致します。

- ・年会費 3000円
- ・慰霊祭参加者お一人につき 玉串料 500円
- ・直会参加者 5000円
- ・寄付金 ご協力お願い申し上げます

昨年、靖国神社御創立150年記念事業の奉賛金として50万円を寄付いたしました。靖国神社に、末永く英霊をお祀りしていただくためでもあります。しかし、当会の会計は決して豊かではありません。広く皆様の浄財を賜りたく、ご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

永代神楽祭

平成30年7月15日、靖国神社にてマール方面遺族会の永代神楽祭を肅行いたしました。今年で16回目となります。当日は靖国神社のみたままつりの最中で、今年から境内の屋台が復活し、家族連れや若者で賑わっております。

午後2時に始まり、本殿へ、神職による山の幸海の幸お神酒の奉奠と続き、神職による祝詞奏上、御霊の名前をお一人お一人読み上げマール・ギルバート諸島の名前が読まれたのは40分を過ぎていました。その後、太鼓・横笛・和琴・歌の合奏に合せ巫女による浦安の舞が披露されました。雅

靖全国戦没者追悼式

高林 芳夫

平成30年8月15日、天皇后陛下の



参加者（敬称略・順不同）
東京都 米林義昭・米林美智子・中村秀夫・中村順子
埼玉県 小室貞男・小室洋子・佐藤知子・菅野和治・高林芳夫
高林正子 千葉県 菅野四郎 岐阜県 吉田正明

楽の演奏と巫女の優雅な舞に、ひと時身も心も洗い清められた気がいたしました。代表の玉串奉奠にあわせ全員で二礼二拍手一礼の作法にて拝礼し、永代神楽祭は終了しました
毎年7月15日午後2時から行っています。どなたでも参加頂けますので、大勢の皆様に参加をお待ちしております。

ご臨席を仰ぎ政府関係者・各界代表・全国からの遺族代表など約6000名が参列、日本武道館で全国戦没者追悼式が行われました。

天皇后陛下にとつて今回が最後の追悼式となりました。



天皇后陛下のお言葉です。

「本日、戦没者を追悼し平和を祈念する日にあたり、全国戦没者追悼式に臨み、さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たにいたします。終戦以来既に73年、国民のたゆみない努力により、今日の我が国の平和と繁栄が築き上げられました。苦難に満ちた往時をしのぶとき、感慨は今なお尽きる事はありません。戦後の長きにわたる平和な

歳月に思いを致しつつ、ここに過去を顧み、深い反省と共に、今後、戦争の惨禍が再び繰り返されぬことを切に願ひ、国民と共に、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、心から追悼の意を表し、世界の平和と我が国の一層の発展を祈ります」。

当会からの参列者（敬称略）

米林義昭・米林美智子・星野綾子・中村順子・間々田征史・間々田邦子・高林芳夫

東京都戦没者追悼式 清水雅尚

8月15日東京都戦没者追悼式が文京区の文京シビックホールで挙行され、会長代理として来賓参列しました。

式は国歌斉唱、小池百合子東京都知事の式辞から始まり、正午の時報に合わせた黙祷、放送による天皇后陛下のお言葉があり、都議会議長をはじめ、各界の代表者、遺族関係者の追悼の言葉がありました。改めて戦争の悲惨さをかみしめました。

最後に知事をはじめとして関係者の献花があり、次に来賓の献花に移りました。マーシャル方面遺族会代表として2番目に指名されたのには驚きました。多くの団体が全国の追悼式である武道館に行つたためかもしれません。無事に追悼の思いを届けることができましたと思います。

徳原徳子さんご逝去



篤志会員の徳原徳子様が、平成30年10月2日にご逝去されました。享年88才。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

故・徳原徳子様を偲んで

高林芳夫

当会にとつてかけがえのない恩人を失いました。都内でお食事を一緒にした数日後に訃報が届き、驚きを隠せませんでした。

※徳原さんと当会の概略です。

昭和37年、山田（旧姓）徳子さんは単身でマーシャル諸島の大酋長、アマタカブア氏の会社に就職しました。昭和42年、クエゼリン島に勤務していた日系二世の徳原勇さんと結婚し、イバイ島に移りました。

遺族会では同年、クエゼリン島への慰霊碑建立が許可され、昭和43年9月、慰霊碑を横浜港より船便でクエゼリンに送りました。10月29日到着、徳原勇さんが責任者となって慰霊碑の建立作業に着手、12月に完成。徳子さんはその経過を写真に撮って報告してくれました。軍関係者、建立作業に携わった日系の方々によって厳粛なる除幕式が挙行されました。司令官の信頼厚い徳原勇さんは機会あるごとに「遺族はお参りを望んでいません、遺族の思いを叶えて下さい」と訴え続けました。クエゼリン島はミサイル基地のため外国人の入域は厳しく制限されています。徳原勇さんの熱い思いに司令官は心を動かされ、遺族に募参の許可を出しました。それは飛行機の給油時間を延長し、その間にお参りをする、という

特別な計らいでした。昭和50年の事です。これが前例となり、現在では現地慰霊が当たり前のように行われていますが、その実現までには徳原ご夫妻の並々ならぬお力添えがあった事を決して忘れてはなりません。

その後、御夫妻はハワイに居住しましたが勇さんに先立たれ、徳子さんの晩年は一人暮らしでした。徳子さんは毎年、日本に里帰りされ、9月27日に私達と横浜でランチを楽しみ、「来年4月の桜が満開の時期に、慰霊祭に必ず参ります」と、約束して10月2日成田からハワイのご自宅に戻られ、その直後に逝去されました。人生の最後は誰にも迷惑をかけず見事な旅立ちでございました。

徳原様、長い間ありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

※徳原さんと当会の繋がりは会報37号の「現地慰霊」までの記事に記載しております。

※徳原さんご自身の手記は、当会HPのインフォメーション（2017年掲載）に掲載しています。ぜひご覧ください。



横浜でランチをご一緒したときのお元気なお姿。
徳原様 ありがとうございます。

新入会員（ ）内は英霊との続柄

東京都 保証 務様（子）
山口県 安藤正子様（子）
ご入会ありがとうございます。

寄付者ご芳名

京都府 東地井義訓様
熊本県 土田利子様

埼玉県 植田和明様
山口県 安藤正子様
心より感謝申し上げます。

訃報

神奈川県 佐藤登志様
神奈川県 松江正子様
広島県 奥井禮子様
石川県 吉光澄子様
ハワイ 徳原徳子様

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

●直会旅行の寄稿をいただきました。

小田急新型ロマンスカーで
「天下の険」へ

石川県 河崎仁衛

満開の桜に埋もれる大社で、父との出
会いに胸を膨らませながら、早朝の時、
まだ目の覚めやらぬ金沢駅のシンボル
「鼓門」をくぐり抜け車窓の人となった。
此の2月に37年振りの大雪に見舞われた
北陸は陸路、空路がマヒ状態となり、白
一色の陸の孤島と化してしまいました。

その様な状況にも関わらず、唯一、3年
前、北陸経済の浮き沈みを背負って開通
した北陸新幹線だけは寸分の誤差もなく
金沢〜東京間を走り続けていました。総
理大臣当時、我田引鉄と揶揄されながら
も、15年後に自らの信念を曲げることな
く「フル規格軌道」で、金沢開業にこぎ
着けた、森元首相の英断に我慢の甲斐が
あったのではないか・・・そんな思いを
巡らすうちに、8時32分「かがやき50
0号」は東京駅に音もなく滑り込んだ。
急いで九段下のエスカレーターを降り、
大鳥居の前で一礼すると「四、五日遅かつ
たな」（桜の満開）そんな声が何処から
か聞こえたような気がした、自然は儘な
らぬものですね。

特急新型ロマンスカーの展望車席より
眺める相模の国は、小田急沿線と小規模
な農地を串刺しにし、多摩川、相模川、
酒匂川を渡り、小田原駅に着いた。車窓
左側には秀吉の小田原攻めで名高い小田
原城が雄姿を誇示している、言わずと知
れた現在の神奈川、東京、埼玉、群馬辺
りを勢力圏に乱世に名を連ねた北条一族
の居城である。小田原から終点までの20

分余りはさすがの新型車も少し喘ぎながらの山登りで沿線に咲く桜の花に励まされながら、無事箱根湯本に着いた。

流石に天下の名湯箱根温泉郷の玄関口湯本温泉は観光客でごった返し、狭い急坂の多い温泉街をフラットバスに乗って、老舗旅館岡田屋に10分くらいで到着した。旅の疲れは湯船で癒すのが一番、源泉かけ流しの弱アルカリ性単純泉に浸りながら、夕食の料理を思い浮かべる……こんな自分は贅沢すぎますかね、ミレー島で直弾を受け散ったと聞く、父に少し悪いような気がしました。

懇親会は盛況であり、お酒も進み、酔うほどに歌も軽やかとなり、皆さんの満足そうな笑顔に今回も参加して良かったと思った。

二日目、相模湾の新鮮な魚介類をふんだんに並べたバイキング朝食を美味しく頂いた。その昔、箱根の山は「天下の険」と謳われた難所であり、気を引き締めて岡田屋を出発した。しかし、現在の箱根といえは強羅まで「登山電車」、早雲山まで「ケーブルカー」、大涌谷、姥子、桃源台までは「ロープウェイ」、そして

芦ノ湖は「海賊遊覧船」に乗って箱根峠の関所に辿り着くようになっていた。マーシャル方面遺族会慰霊祭の靖国神社参拝手形は効果あらたか、全員即座に通行が許され、箱根登山バスに乗り、大田原の六区走者のような気持ちで小田原駅に戻った。

道中は晴天に恵まれ、大平台の桜に見惚れ、大涌谷の黒卵を味わった。桃源台からの海賊遊覧船は名前に似合わず、静かに芦ノ湖を渡った。しかし、乗船客は西洋人が多く、彼らには旅慣れたどことなく気品を感じるものがあります。向かいの二つの国の人が意外と少なかったのが幸いでした。小田原駅周辺の食事処で遅い昼食を済ませ、流れ解散になった。

今回、企画並びにインストラクターまで勤めて頂いた、清水副会長に大変感謝致します。また、須藤、安藤さん新幹線にうまく乗れたかな、そんなことを念じながら、翌日、元気で金沢に帰ることが出来ました。

皆様、来年も元気で会いしましょう。



平成30年度 ウオッセ島戦没者遺骨 調査派遣

鈴木千春

11月4日から16日までの13日間、戦没者遺骨調査のためウオッセ島に行つてきました。現地到着まで3日を要するため、実際の調査日数は6日間でした。



アイランドホッピングでマーシャルへ

メンバーは、一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会の専務理事・事務局長、竹之下和雄氏（昭和48年、東海大学の船でウオッセの遺骨収容に携わった方）、同会の白方勝彦氏（祖父がロイ・ナムルで戦死）、日本遺族会から岡村勝利氏（父がウオッセで戦死）、JYMA日本青年遺骨収集団から私、鈴木千春（大叔父がウオッセで戦死）の4名です。

73年前のウオッセは壮絶な飢餓の島でした。昭和19年2月以降、一切の補給を絶たれ孤立し、食糧不足の中、兵士はバタバタと餓死していきました。戦没（餓死）者数（記録によりバラつきがありますが）厚労省発表では2900名。そのうち208柱の遺骨を昭和46年、48年に政府派遣団が収容しています。今回は45年ぶりとなり、地中に眠る2700名の調査が目的でした。

調査派遣に至るまで

マジュロから約300キロ離れたウオッセ島の芝生の滑走路に着陸した瞬間には、胸にこみ上げるものがありました。私は以前、沖縄や硫黄島で遺骨収容を経験しましたが、どうにかして大叔父の戦没地、ウオッセでの遺骨収容ができないものかと長年願ひ、関係省庁に働きかけていました。多くの方々のご尽力で、念願が叶い、現地調査に参加することができました。

在マニラ日本国大使館の岩田哲弥領事、そしてウオッセ出身で祖父が日本人というオタ・キシノ市長（マジュロ在住）、この2人のキーマンがいなければ、

未来永劫ウオッセに調査に行くことはできなかつたと思います。

遺骨収容は厚労省の管轄であり、現在、厚労省から日本戦没者遺骨収集推進協会に委託されています。まずはウオッセを調査対象にしてもらわなければ何も始まりません。

当然ながら、厚労省は「日本人戦没者の骨がある」という正確な現地情報がなければ動けません。かつて、ウオッセにはJICA職員が1名派遣されていましたが現在、日本人は住んでいません。私自身も行ったことがなく、現地の遺骨に関して、なんの手がかりもありませんでした。

ないない尽くしの中、一縷の望みをかけ、自分が10年以上コツコツ集めた日米双方の戦史記録や、生存者の手記、昔の遺族会会報等から、当時の戦没（餓死）者の「遺体埋葬場所」を探し求め、少しでも有力な情報があれば、その都度、厚労省、推進協会、現地大使館の岩田領事に情報を送り続けました。

7月、岩田領事が直接、現地視察に行かれ、遺骨を見つけ、厚労省に連絡して

いただいたことで、調査派遣が大きく前進しました。



歴史保存局に表敬訪問（左から2人目が同行した考古学者スーザン・アンダーブリンク博士）



大使館表敬訪問
右から、岡村氏、岩田哲弥領事、白方氏、竹之下団長、齋藤法雄全権大使、鈴木、渡邊博参事官

また、オタ市長は昨年5月、ヒルダ・ハイン大統領に同行し「太平洋・島サミット（太平洋島嶼国首脳会議）」に出席、安倍総理大臣と会談されました。市長は、マーシャル諸島の戦没者遺骨の現状を説明され、その際、安倍総理は市長の目をじっと見つめ、全ての説明を丁寧に聞きながら聞いた後、「日本国にとつて戦没者遺骨収容・帰還は重要課題のひとつである。戦後、既に73年経過してしまった中、戦没者を直接知る親族が御存命中に、何とか遺族のもとに遺骨を帰還させたいと考えている。それを集中・加速させるため戦没者遺骨収集推進法を成立させ、政府として力を入れている。この事業は、二国（日・マ）間の協力関係・友好関係なしにはできない。より一層の御協力をお願いと、更に二国間の様々な分野における関係促進・強化をしていきましょう」とのお話をされたそうです。

ウオッセ派遣を願っていた私にとつて、安倍総理のこの言葉は、最高最強の援護射撃でしたので、とてもありがたかったです。

後日、ウオッセ決定の連絡が届きました。

た。とても大きな第一歩でした。



ウオッセ出身で祖父が日本人というオタ・キシノ市長

離島の複雑な土地制度

ウオッセの土地制度は特殊で、島内は35の区画に分かれ、一つの区画に4名の地権者がいます。島の最大面積の地権者が、大酋長（イロージラブラブ）で、その下に（区画ごとに）イロージ、アラップ、リジヤルバルという地権者がいて、4層構造を成しているため、人数が多いのです。全員の了承がなければ試掘はもちろん、エリアに入ることも許されません。マーシャルには国有地はなく、すべてが私有地。日本では考えられないシステムの国でした。

そこで、オタ市長のご尽力があり、岩田領事とともに事前に、地権者に根回しをして、私たちと地権者を結ぶ「説明会」を各所で開催してくれました。私たちは行く先々で調査の説明をし、お土産のお菓子を手渡して誠心誠意、理解と協力をお



アラップへの説明会

求めました。45年ぶりですから、お互い「はじめまして」です。初対面のお相手の庭先を調査させていただくことになるので、何事も細心の注意を払い、丁寧に、順番を間違えずに、話を進めなくてはなりません。

地権者ははじめ、少し警戒している様子でしたが、オタ市長のリーダーシップと、岩田領事の細やかなコーディネート、離島の事情通である通訳・橋本岳氏の流



ご賛同いただき、記念写真

からは、「家族の遺骨を国に帰したい」と思う気持ち、マーシャル人も日本人も一緒である、「100%協力したい」という心強いコメントもいただき、感涙しました。

島の15か所を調査

トラックに乗り島内を巡ると、あちこ

暢なマーシャル語、すべてに助けられ、全員のご賛同をいただくことができました。ほかの案件では、反対意見がでて揉めることが多いなか、奇跡的なことでした。派遣メンバー全員が、ウオッセに深い縁があることを知ったアラップの一人

ちから情報が届きました。20年前のものから、数カ月前の発見情報まで、複数寄せられました。早速、現地の若者たちの協力で、現場を掘ると、ここでは大腿骨、ここでは肩甲骨と次々発見されました。

私たちはGPSで発見場所を記録し、次回の遺骨収容団のためにマッピングをしていきます。同行した歴史保存局の考古学者の米国人女性は、遺骨からある程度の年齢がわかるので「なんて若い！彼は25歳以下だわ」と遺骨を手に、呟いていました。

73年前、島に刻まれた凄惨な歴史を想像しながら搜索しました。深い草むら、砲台のそば、砂浜、行く先々に骨片があり、若い兵士が、食べる物なくフラフラとさまよったであろう島の隅々に、彼らの「無念」がしみ込み、骨片は「俺はここにいないぞ」と叫んでいるようでした。彼らはどれほど日本に帰りたいことだろう、遠く故郷の家族を思い、母の炊いた白いご飯をお腹いっぱい食べたかったらうな……。私は大叔父に、故郷・

花巻のお水とお米、お菓子を供えました。

この南海の果てで、力尽きた将兵の悔しさ、悲しみの声が、草深く湿った地中から聞こえるようでした。

私は、帰りの時間が近づくほど、焦りがでて、「お願いだから地中から光って、私たちに居場所を教えてください」と、心の中で叫んでいました。



島内に残る戦争の傷跡

2月に収容派遣

年間平均気温30度で高温多湿。何もしなくても汗が吹き出します。昨年の日本の夏も酷暑でしたが、加えて紫外線が日本の13倍もあります。高い湿度と照り付ける日差し、時折りスコールに襲われ、体力を奪われます。

私たちの宿泊所のエアコンも4部屋中、3部屋故障してしまいましたので、体力的にも厳しい6日間でした。

反面、雑草には快適な環境なので、あつという間に成長します。今回、一所懸命伐採した箇所は、今頃はうっそうとした草むらに戻っていることでしょう。米軍から大量の爆弾が投下され、この島に残ったヤシの木はたった一本だったそうです。その時であれば、遺骨は発見しやすかったはずですが、73年が経過した今ではジャングル化しているのでかなり困難です。

残る2700の英霊をお迎えするに



証言のあった場所を捜索



次回収容団のため発見場所に目印をつける

はまだまだ時間がかかります。しかし、やっとうオッセでの「第一の扉」が開かれました。何年かかっても、お迎えにいかねばなりません。

遺骨袋を胸に抱えたとき、ウオッセに行きたくても行けなかった遺族（母、妻、兄弟・姉妹）の心痛が、昔の遺族会報告に書かれていたことを思い出しました。私は今、その方々の代理でウオッセにいる、長い年月が過ぎてしまっただが、母たちを代表してここに来たのだという自覚を持ちました。

最終日、空には大きな虹が二重にかかっていました。英霊からのメッセージももらった気がしました。

※ ※ ※

今回は「調査」のため、遺骨を日本にお連れできませんが、2月の収容派遣で英霊を日本にお連れできる予定です。

引き続き、地権者との友好関係を維持し、途中で頓挫することなく、全ての英霊に



島内どこも深い雑草地

日本にお帰りいただけるよう、収容派遣が長く続くことを強く祈念いたします。ウオッセは地理的に遠く、環境的に厳しく、時間や約束に関して、大らか過ぎる国民性など、日本とは全く違うため、戸惑うことも多くありました。しかし、目的の一つ、「英霊の遺骨を日本に帰す」ことです。

準備期間から献身的に私たちをサポート

トして下さった岩田領事は、「外交官の鑑」でした。ここに至るまで、いくつもの問題が発生しました。その都度、忍耐強く調整し、一つずつクリアし、私たちの環境を整え、調査がスムーズに進むよう、完璧なコーディネートをしてくださいました。最大の恩人です。

そして、安倍総理との約束通り、力を尽くして下さったオタ市長、完璧なマーシャル語で交渉して下さった通訳・橋本氏、生活面では現地ガイドとして(マジュロで輸入ショップを経営する)MJCC佐藤氏の行き届いたサポートに助けられ、調査ができました。

また、齋藤法雄全権大使をはじめ、在マーシャル日本大使館の皆様には、準備段階から多大なるご協力をいただきました。

さらに遡れば、戦史史料の搜索中、情報を下さった方、貴重な史料をご提供いただいた方、米軍史料を訳し、分析して下さった方、現地の情報収集に協力いただいた方、本当にたくさんの方に助けられました。

お力添えをいただいたすべての皆様

に、深く、深く、感謝を申し上げます。

※3月7日(木) 10時30分より、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、遺骨引渡式が実施される予定です。



ウオッセ最後の夜、地方議員とアラップに対する調査報告会



艦上攻撃機「天山」プロペラのある広場では子供たちの運動会



3人の恩人。右から岩田哲弥領事
MJCC 佐藤恒介氏、通訳・橋本岳氏。



ウオッセ遺骨調査に協力していただいた頼もしいメンバー



調査最終日に現れた虹



ウオッセの海



東太平洋戦没者の碑に参拝し、日本に帰国



プロペラの広場に祭壇を作り、全員で参拝